

極樂へ行く船のたよりに

十日の御説法將に終らんとする時、一陣の風が吹き來つた。其時木の葉が一枚高座の上に落ちたので、拾ひあげて御覽なされたれば、蟲喰ひて歌の下の句が書けてある。其句は「極樂へ行く船のたよりに」といふのであつた。そこで源信和尚が誰ぞ上の句をつけるものはないかと御尋ねなされたれば、一人の老僧が大音聲で「法の道知る人あらば渡すべし、極樂へ行く船のたよりに」とつけられたら、満堂の參詣人が大いに感心した。處が九十日の間一座も休まず參詣せられた老婆が、阿彌陀如來の御慈悲は、左様な水臭いことでは御座るまいと悲しまれた。そこで源信和尚が何故に此句が不足なかと御尋ねあらせられたれば、さらばでござる、法の道とは八萬四千の法門のことでござりませう。然れば八萬四千の法門どころか、一卷の御經も讀めぬ我々は洩れねばならぬことゝなりますと申上げられた。そこで源信和尚が然らば老婆の了解を讀んで見られよと仰せられたら、老婆が大聲をはりあげて「法の道知るも知らぬも渡すべし、極樂へ行く船のたよりに」と

て分け隔
本の願

詠じたので、一座の参詣人も大に感じ、源信和尚も御ほめあらせられたとある。

四 時に同行「聞いただけでは役には立たぬ、いよく御受けが出来ましたか」

「ハイ私は處一番の愚者で御座いますので、頓と御受けが出来かねます」「ソウカ

御前の近所に極樂へ参れさうな同行はないか」「ハイ御座います」「其同行は御前

よりは賢いか」「ハイ、賢いとも、賢いとも、五段も十段も上で、三里四方には

ありません。此近在では第一等賢い人で御座います」「御前は其人の通りにはな

れぬか」「中々なれませぬ」「コレ同行、よく聞かうぞや、三里四方の第一等賢い同

行は助ける、一等愚かな同行は捨てるといふ様な、分け隔てのある御慈悲やと

思ふは了簡違ひぢやぞや。智愚善惡の分け隔てなく、御助け下さること、信じな

さい」。

五次に差別門の方は、御慈悲の深きことを顯すのである。阿彌陀如來の本願を

起したまふ正しくの目的は、逆惡の凡夫の爲の悲願である。依つて既に法然上人

凡夫の
願の本

は選擇集の中に「元曉の曰く、淨土宗の意は本は凡夫の爲にして、兼ては聖人の爲めなり」と仰せられ、祖師聖人は愚禿鈔の中に「一には菩薩、二には緣覺、三には聲聞辟支佛等は淨土の傍機なり。四には天、五には人等は淨土の正機なり」と仰せられてある。是全く本爲凡夫の別意に約して、二十五有界に流轉する凡夫が、本願の正所被の機たることを顯したまふ御釋である。近くば御和讃の御左訓に「二十五有の衆生といふは、すきてむまるゝこゝろなり」と仰せられてある。諸有とは、二十五有のこと、二十五有とは四洲(四)、四惡趣(四)、六欲(六)、梵天(一)、四禪(四)、四無色(四)、無想(一)、五那含(一)。これを欲界、色界、無色界の三界とも、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道とも名付てあつて我々の迷ひ歩く境界である。スギテムマルルとは二説ありて、一にはスギテムマルルとよめば、三界六道二十五有界を展轉して、生れかはり死にかはり、迷ひ歩かぬ里もなく、受けぬ形もなく、曠劫來流轉と尺蠖の循環するごとく、あちらこちらと迷ひ歩くと

いふことになる。又二にはスキテムマルルと讀めば、スキとは、酒好き餅好きといふ好の字のころで、我々は他人が迷はせるのではない、自身が好きで迷ふのである。上戸は酒を好き、下戸は餅を好く如く、自分が好いて迷ふのであると仰せらるゝことゝなる。

好きなら嫌

六時に筒様に申せば天上界や人間界なれば、好きで生るゝ者もあらんなれども、如何に愚かな凡夫なればとて、地獄や餓鬼や畜生へ、好きで生るゝ者は無からふと思はれやうが、これは世間のことで考へて御覽なさい。好きながら嫌ふことになるともあり、嫌ひながら好くことになるともある。貧乏になりたい、困窮がしたい、身代限りがしたいと好く者はなけねども、

朝寝して夜寝るまでに晝寝して

起きて居る間は居ねむりをする

といふ風情で、ぶらゝ遊んで家業を怠り遊興にふけり、金錢を無制限に費消す

るなら、夫が即ち貧乏を好む道理に當る。「入るを量りて出ることなす」と申す
ことがあつて、一年に千圓の収入よりない者が、二千圓も消費し、一箇月に一萬
圓の収入があつても、二萬圓づゝも消費する様だと、夫が身代限りの破産を好く
道理である。果を嫌うても因を好めば果は必ず報ひ來る。三惡道の果は嫌ひで
も、三毒五欲を好めば果は自ら來る。然るに我々は念念所作、皆是三途業と、
毎日々々雨の降る日も風の吹く夜も、休みなく罪業を造り、迷ひの因を蒔くこと
にかゝり果てゝ居る、夫が好きで止められぬ。こゝを見ぬかせられて、スキテム
マルルと仰せられた。箇様な愚かな徒者を、諸有の衆生と呼びかけて本願の正
客とは、諸佛に勝れた。深重の御慈悲と頂かねばなりません。
七時にこの第十八願正所被の機を見定むるにつき、唐の憬興、法位、玄一など
の歴々の説には、第十八願に五逆謗法を除くどあり、四十八願の初めに無三惡趣
の願、不更惡趣の願があるからは、上輩の機が所被の機なりと判じてあります。

然るに吾祖師聖人は、其餘かかれたる五逆謗法の悪人こそ本願の正所被の機なりと御示下されました。これは所謂「文は學者の執見による」といふところで、祖師聖人の思召では、無三惡趣不更惡趣の願は、拔苦の願なれば聖者の爲には入用はない、小乗なれば初果以上、大乘なれば初住已上を聖者といふ。聖者は既に見惑を斷ずるが故に、三惡道に落ちる心配はない。若彌陀の本願が聖者の爲なれば、この二願はない筈である。この二願があるので愈三惡道へ落ちねばならぬ悪人が、本願の正機なりと頂かれるのである。又憬興大師などは、唯除五逆誹謗正法の文を以て證據として悪人を除いて善人が本願の正機なりと釋せられたが、祖師聖人の思召はそれとは全く反對で、其餘かかれた五逆謗法の悪人が正機なりと、御示しあらせらるゝ。其趣きを口傳鈔に「抑止は釋迦の方便なり。眞實の落居は彌陀の本願に極まる」と仰せられた。抑止といふは、おさへどめるといふことで罪を造ることをおさへどめるので、未造業に對して押へどめるのである。この抑止

の文があるので、いよ／＼悪人が本願の正機と知られる。五逆罪でも謗法罪でも造り兼ねぬ。徒者が御目的ゆる、抑止の文が入用である。そこで五逆謗法の者は、彌陀の本願でも助からぬと、釋迦如來が誡めたまふのである。彌陀の願意は、其五逆謗法の徒者が正機なり、釋迦の抑止は彌陀の選擇攝取の正機を顯す。「家の跡は取らせぬぞ」と叱るので、跡取り息子といふことが知れる。五逆謗法の者は除くと抑止せらるゝので、御目當は五逆謗法の悪人と知れる。依つて祖師聖人信卷の欲生釋のしたへ、唯除五逆謗正法の文を引きたまふ。欲生心とは彌陀の悲心招喚の勅命で、施す所の至心信樂をもちて、我國に生れんと願へよとの大悲の勅命、其勅命の對手は、除かれる様な五逆謗法の悪人なりと、御示し下さるゝ思召ならん。是から頂いて見れば、釋迦如來の抑止は却て彌陀の選擇本願の正機を顯す故に、信卷の終りには「難化の三機、難治の三病、大悲弘誓を憑む」と仰せられた。一代經の手に餘つた、諸佛化益の手のつきた難化の三機を救ふは唯彌陀

の本願ほんぐわんばかりである。末代まつだい難化なんけの悪人あくにんは、彌陀みだの大慈だいひをたのむより外ほかはないぞとの御意おこゝろである。これを略文類りやくもんるいの終りをはには、常没じやうもつの凡夫人ほんぶにんとのたまふ。常没じやうもつとは一闍提せんだいの悪人あくにんのこと、一闍提せんだいといふは無信者むしんじやのことで、川の底そこに沈しづんで浮うかむことのならぬを常没じやうもつといふ。善導ぜんだう大師だいしは常没常流轉じやうもつじやうるてんと仰あふせられて、浮うかむ手がりのない五逆ごぎやく謗法ぼうぼう闍提せんだいの徒者いたづらものが、本願ほんぐわんの正機しやうきであると御知おしらせ下くだされました。かゝる謂いはれが聞きえたら、五劫ごこく思惟しゆいの本願ほんぐわんも兆載てうさい永劫えうこくの修行しゆぎやうもたつた此この私わたくし一人ひとりの爲ためであると頂いたかれることである。

第三席 名號と本願

其そのを指さす
何なにを指さす

一 引續ひきつづいて第十八願じゅうはちごん成就じやうじゆの文もんに就ついて御話おはなし致いたしますが、今回こんぐわいは聞其もんご名號みやうがうの一句くを辯べんじます。この一句くは至いたつて大切たいせつであります。先其まづごとは字書じしよに、指さすところある言葉ことばと註ちゆうして、其火鉢そのひばちとかいふ如ごとく、指さすところがなけねばならぬ。今其いまそのと

佛願の
生起

御指しあらせられたは、此文の前に「十方恒沙の諸佛如來、皆共に無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讚嘆したまふ」と説きたまふ。これは彌陀の第十七願に酬報して、十方恒沙無量の諸佛が、阿彌陀如來の功德を讚嘆したまふのである。其讚嘆を指して其名號といふ。聞かせ手は十方恒沙の諸佛如來、この世界では釋迦如來が十方諸佛の代表者である。聞手は二十五有界の迷の衆生、其所讚の法は如何ぞと尋ぬれば、信卷に「佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし」と御釋あらせられてありてあります。

二 佛願の生起とは阿彌陀佛の本願は何から起つたといふことで、即ち御文に「夫彌陀如來の超世の本願とまうすは、末代濁世の造惡不善の我等ごときの凡夫のために、おこしたまへる無上の誓願なるがゆるゑなり」と御示しあらせられた。病を治すための藥なれば、痛む腹へ藥を吞むに遠慮はいらぬ。凡夫御目的の本願なれば、妄念妄執の心の中へ本願を信するに遠慮はない。我身は惡き徒者なり

と思ひとりて、かゝる機までも助けましますは阿彌陀如來御一佛ぞと、深く信じ奉るが他力至極の金剛心と申すものである。

佛願の本末

三次に佛願の本末とは、古來の學者が種々の義を立てられてある。一には如來淨土の因果を本とし、衆生往生の因果を末とす。二には一念の信心を本とし、多念の報謝を末とす。三には衆生の往生を本とし、彌陀の正覺を末とす。四には正因を本とし、往生を末とす。五には第十八願を本とし、四十七願を末とす。六には第十七願を本とし、第十八願を末とす。七には念佛を本とし諸行を末とす。八には第十八願を本とし、十九二十の二願を末とす。九には十八の因願を本とし、第十八願成就を末とす。十に第十八願を本とし、名號を末とす。十一に本末とは始終といふが如しといふ義。斯の如く蘭菊美を争うて、力を盡し義を設けてあるが、今日は學問沙汰を止めて、同行方の信心を得らるゝ様に手短に御取次を致すことゝする。

曇鸞大師の論註に「本法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力」とある。然れば因位の本願は始めであり本である。今日果上の阿彌陀如來の自在神力は終りであり末である。是因位の本願が本となつて果上の自在神力を御成就なされて、衆生を濟度したまふが末である。然ればその自在神力とは如何であるかと申せば、第十八願の約束通り、信じ稱ふる者を助けたまふが阿彌陀如來の自在神力で、即ち是が南無阿彌陀佛の六字の謂である。手短に申せばたのむものを必ず助くる、稱ふるものを必ず迎へるとあるが、即ち本願名號の謂である。先たのむものを助くるとは、第十八願の三信、稱ふるものを迎へるとは、乃至十念の御意にして、共に南無阿彌陀佛の六字の體相である。行體の方からいへば、たのむものを助くるの仰せとなり、行相の方からいへば稱ふるものを迎へるとの仰せとなる。信と行と、體と相との差別はあれども、一名號の謂にして、共に如來の御誓願である。

然るに近來勅命に好き嫌ひをして、たのむものをの勅命に片よりて、稱ふるものをの勅命を嫌ひ、たのむものをの勅命でなければ腹がふくれぬ、稱ふるものをといふやうな自力臭い勅命は嫌ひぢや。全體元祖のお勧めは粃で、祖師のお勧めは玄米であるから、蓮如上人の御勧めでなければ白米ともいはれぬ。祖師の御勧めは去年の曆の様で、祖師の御時には宜しかつたけれども、蓮如上人以後の時機には合はぬ。そこで御和讃は頂かぬ、御文は頂く。御消息の奥書に「右蓮如上人文の如く、信心決定あるべきものなり」と記してあり。御代替りの時には御文の御印を御替あらせらるゝのであると申し募る。

夫に對して、又稱ふるものを迎へるとの仰に片寄るものは、雜行すて、一心に後生助けたまへと彌陀をたのむといふ様な、むつかしい面倒な安心は嫌ひである。全體阿彌陀如來は愚かな凡夫を正機として御本願を御立て下されたのである、夫に二義の三義のとむつかしい安心を御立て下さる筈はない。そこで我々は

稱ふるもその息は自力仰る？

頼んだか、頼まぬかといふ様な機世話はやかぬ。唯念佛するものを御助け下さるとある本願を不思議と信じて、御約束の念佛を稱へて居るばかりで安心して居る。蓮如上人は、末の末の八代目である。我等は本の本の御開山の御假名聖教で、安心を極めて居ると力説する。これは双方共心得誤りである。

四 先初めに稱ふる者をその仰を、自力臭いとは何事ぞや。稱ふる者を迎へるとは所信の行と申して、信心を得させて下さるゝ御言葉である。酒を渡す時は呑めというて渡す。南無阿彌陀佛の名號は稱へもの故、我名を稱へよと渡して下さる。夫を信受する一念に御廻向に預る故、選擇本願信すれば、不可稱不可説不可思議の功德は行者の身にみたり」と御示しあらせられてある。是が乃至十念の御誓である。この勅命を自力臭いと思ふは聞き様が悪いからである。同じ稱ふる者を助くると聞いても、十九の願の機は萬行隨一で、易行とは聞けども念佛の勝れた事を知らず、二十の願の機は多善根多福德の勝行とは聞けども、本願の嘉號を

以て己が善根と心得るが故に、稱へ心が自力となる。第十八願の機は、稱ふる者を助くるとある本願の不思議を信するが故に、他力の信心となる。こゝを審に御知らせ下されてあるが、歎異鈔の御示しである。一誓願の不思議によりて、たちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと、おんやくそくあることなれば、まづみだの大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死をいづべしと信じて、念佛のまをさるゝも如來のおんはからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆるに本願に相應して眞實報土に往生するなり」と御意なされてある。この御言葉について誓願の方ど、信じふりとをよくノ、味はねばならぬ。名號を稱へん者を迎へんとは御誓の方である。然るに行者の受手前では、稱へて助からうとかゝるではない、稱へますから御助け下されと、行者の能行を役に立て、向ふではない、先づとは、稱へるよりさきにといふこと。彌陀の大悲大願の不思議に助けられて、生

死を出づべしと信ずるのである。こゝを同じ歎異鈔に「彌陀の誓願不思議にたす
けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこ
ころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」と仰せら
れてある。念佛まをしてから信ずるのではない、信の一念は、念佛まをさんと思
ひたつ位なれば「あゝからいといふはあとなり唐辛」南とも無とも口へはまだ出
さぬさきに信の一念はある。其彌陀の誓願不思議に助けられて、往生をとぐるな
りと信ずる一念の時、即ち攝取不捨の利益に預り往生一定の身となりて見れば、
一聲の稱へぞめからが多念報謝の稱名となる。決して自力作善の念佛でもなく、
挾善趣求の念佛でもなく、慶喜歡喜の念佛である。稱へますから助けて下されと
いふ様な、まゐらせごころの念佛にあらず、稱へてさへ居れば助けて下さるであ
らうといふ様な、爲替に組む念佛にあらず、信の一念に御助けに預つて、往生一
定御助け治定と存じた上の念佛なれば、稱へるこゝろは御助けありつるありがた

稱ふる
むさたるの

さ、尊たをさの念佛ねんぶつとなる。源みなもこは第十八願だいいちじゅうはちがんの乃至十念ねんじゅうじゆの選擇せんぎやくせつしゆ攝取おぢまひの御誓おちかひで、稱さなへさ
せて下くださるゝ彌陀廻向みだゑかうの正定業しやうぢやうごふのだいぎやう大行だいぎやうである。其念佛そのねんぶつが則すなはち行者ぎやうじやの稱さなへごころ
は、慶喜報恩きやうきほうおんの念佛ねんぶつである。これが自力じりきくさ臭くさいとりやうけんちが量見りやうけんちが違ちがひである。十劫じゆじやく正覺しやうぎやくの始はじ
め一度たび御成就ごじやうじゆあらせられてより、阿彌陀如來あみだにょらいの御命おいのちのあらん限りかぎ變かはらぬが、第十
八願だいいちじゅうはちがんの約束やくそくであれば第十八願だいいちじゅうはちがんの中に去年きよねんの曆こまのあらう筈はずはない、されば元祖もとそ吾祖わがそ
の御化導ごけだうは玄米げんまいである、蓮師れんしの御化導ごけだうは白米はくまいである。御和讃ごわさんは頂いただかぬが御文おふみは頂いただ
くといふのは、是これは安心あんじんに關係くわんけいのあることではなくて、故實こじつといふものである。
五 稱さなふるものを迎むかへるとの仰あふせに偏かたりて雜行ざふぎやうすてゝ、彌陀みだをたのめといふ様やう
な、むつかしい安心あんじんは、嫌きらひである。全體ぜんたい阿彌陀如來あみだにょらいは愚おろかな凡夫ぼんぷを正機あいてとして、
本願ほんぐわんを御立おたて下くだされたのであるから、二義ぎの三義ぎのと、むつかしい安心あんじんを、御立おた
て下くださる筈はずはない、そこで我々われくは、たのんだかたのまぬかといふ様やうな、機世話きせわは
やかぬ。唯念佛たひねんぶつする者ものを、助たすけるとある本願ほんぐわんを、不思議ふしぎと信しんじて、御約束おやくそくの念佛ねんぶつ

を、稱へて居るばかりで、安心して居るといふは、偏よつた心得である。其趣は、先彌陀をたのむが、むつかしいの、面倒なとまをすは、何事ぢや、蓮如上人のおほせに、『信心安心とまをせば、愚痴無智のものは文字もしらぬなり。雑行すて、後生たすけたまへと、彌陀をたのめといふべし。いかなるものも、きゝて信をとるなり』と仰せられて、易く信心を、得させて下さる御化導である。

よつて蓮如上人の、當時にあつては、御文に講釋はいらぬ、いかな愚な者でも、聞いて信心を得たのである。然るに講釋のいる様になつたは、四百餘年を経過して、普通の人の言葉の、遣ひ方が、變化したから、講釋が入用となつたのである。

六 時に言葉の講釋といふものは、頗るむつかしいもので、或處の禪宗の小僧が火を持つて來た處、火の粉がこぼれて、小僧の足にかゝつた。小僧がアツイといふて、足を引込めれば、和尚がこれを見て、「こりや小僧、あつといふはいか

火をばに
ぎれに
誰でい
あつ

なることか、あついといふ言葉をのけて此方へ知れる様にいうて見よ」といはれた。そこで小僧が「へい〜」と返事はしたれど、頓といはれぬ。和尚曰く「あついといふこと位が、知らせられぬ様なことでは、住職は譲らぬぞ」と。そこで小僧が頓智を出して、残りの火を和尚の手にかけた。和尚が「あつ〜！」といはれたから、小僧が「和尚様あついといふは、いかなることか、あついといふ言葉のをのけていうて下され」といふたら、和尚もいはれぬ。そこで小僧が「和尚のなりして、あついといふこと位の講釋が出来ぬなら、住職を譲られよ」と打返したら、夫でこそ禪宗の證りも、開けるであらうとて、住職を譲られたとある。これでよく〜味うて見ると、あついといふ講釋は中々むつかしいが、火に觸れてあついと思ふは、むつかしいことではない。火に觸るれば智慧もいらす、思案もいらす只あついと思ふより外はない、冷煖自知とはこのことである。

今もその如く、助けたまへと彌陀をたのむといふだけでも、講釋するとなれ

ば一寸では出来ぬけれども、彌陀をたのむといふことは、何もむつかしいことではない、「末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、罪はいかほごふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべし」とある仰せを、後生大事の腹底へ、御受けして見れば、智慧もいらす才覺もいらす、何の様もなく、一心に彌陀をたのむよりほかはない。近來は高座の上で、むつかしい講釋をすることが流行ゆゑ、夫を手本にして、よりかゝり任すところを、こしらへにかゝつたり、たよりにしちからにするところを、おこしにかゝつたり、こひもとむるところもふくむときいては、もどめごころをくはへにかゝつたりして、藥劑師が調合するやうに、二義三義のこゝろを、作りにかゝるゆるゑ、むつかしうてく、何年聞いても、丁度加減のよい信心は出来ぬのである。左様なことに、かゝつて居ては、十年聞いても、百年聞いても、千劫萬劫かゝつても、信心は得られぬ。そこを祖師聖人は、「淨信得がたく極果證しがたし、なにをもてのゆるゑに、往相の廻向によらざる

がゆるゑに」と、御釋おんしやくあらせられた。他力廻向たうりききやうの信心しんじんを、凡夫ぼんぶの方かたで作りつくにかゝつては、億劫おくこふにも起おこることではない。夫それよりは自力じりきをすて、御廻向ごゑきやうにあづかれば、易やすく得えられる。

つくるより貰ふは初すし初

七 「つくるよりもらうはやすし初はつなすび」、茄なすび一つも自分じぶんに作るつくはむつかしいが、

もらふは易やすい如ごとく、「眞實報土しんじつほうどの正因しやういんを、二尊そんのみことにたまはりて」とあるからは、招喚發遣せうくわんはつけんの勅命ちやくめいより、頂いたいて見みれば、何なにもむつかしいことはないのである。

故ゆゑに蓮如上人れんによしやうにんは、「あらこゝろえやすの安心あんじんや、とりやすの信心しんじんや、かゝるやすき

ことを、いまゝで信しんじたてまつらざることのあさましさよ」と、御意ごいあらせられ

てあります。夫それを御註文ごちうもんの様やうに心得こころえて、順したがへと仰あふせられりや、順したがひ心こころを拵こしらへにかゝ

り、任まかせよと仰あふせられりや、任まかせごころを作りつくにかゝり、たよりちからにせよと

仰あふせられりや、たよりちからにするこゝろを、起おこしにかゝつて居ゐるゆるゑ、むつか

しくなつて仕舞しまふのである。御勅命ごちやくめいは御註文ごちうもんではない、信心しんじんは御廻向ごゑきやうである。彼あな